

# 靴をはいた巨大児

私の取材ノート

鎌田 慧



日本評論社

# に巨大児 に巨大児

私の取材ノート

鎌田 慧



日本評論社

## 靴をはいた巨大兎

一九八一年三月二〇日第一版第一刷発行

著者——鎌田 慧

発行所——日本評論社

東京都新宿区須賀町一四

電話〇三—三四一—六二六一

振替東京〇—一六

印刷所——東洋印刷株式会社

製本所——難波製本

©鎌田慧 検印省略 Printed in Japan

鎌田 慧（かまた さとし）

一九三八年青森県弘前市に生まれる。

六四年早稲田大学文学部露文科を卒業、新聞・雑誌記者などをへて、現在、フリー・ライター。

おもな著書に『隠された公害』『死に絶えた風景』『自動車絶望工場』『逃げる民』『血痕』『日本の兵器産業』『労働現場』『ガリバーの足跡』などがある。

靴をはいた巨大児／目次

おまへの敵はおまへだ

1

対島 17

赤ん坊屋敷 29

鉄の町の片隅で 45

偉人伝 67

見えざる手 83

インベーターを撃て 99

視えない慰霊碑 115

軍手のはなし

139

壮大なるフィクション

149

私の城下町

173

ある崖上の感情

185

身捨つるほどの祖国

205

企業と人間

231

あとがき

251

おまへの敵はおまへだ





渋谷駅から原宿にむかう山の手線のガードの下に、マッチ箱状の呑み屋がひしめいている。“のんべえ横丁”というのが正式な名称なのだが、ここにいるひとたちは、あっさり“後家部落”といってしまふ。敗戦まぎわの建物疎開によって区の所有地になったのだが、そのご、この焼跡に屋台を曳いたスイトン屋や焼鳥屋があつまってくるようになった。国鉄のガードと渋谷川にはさまれた、うなぎの寝床のような細長い一郭は、屋台が目白押しになって戦後の空腹をみたし、あるいは明日へのエネルギーの供給地となった。

まもなく渋谷区は、この土地をこれらの人びとに払い下げることにした。屋台一台分の長さによって、奥行きと左右がはかられ、それがひとりあたりの所有地になった。分譲価格はヒトマス八〇円。カネのある人は、隣りの分も買ってあげた。屋台のまわりには、小鳥が巣をつくるように、ひろいあつめられた板でおおわれ、屋根がふかれ、そのまま飲食

街がかたちづくられるようになった。まだ水も澄んでいた神田川の支流としての渋谷川の岸辺では、食器が洗われ、子供たちのおむつが洗われ、おむつは屋台のうえに干されて、風になびいた。

それから三〇年たったいまなお、このガードと川にはさまれた、酔っ払いがふらふら歩くだけでふさがりするような湿気をふくんだ路に、灯が明るく輝やいているのである。三〇年たって後家たちが引退しても、この水で育った息子や娘たちは、サラリーマンをやめて跡をついでいる。六〇軒の店は、たいがい代替りしたとはいえ、いまなお、夕暮れとともに訪れてくる昔なじみの客たちの談笑の場になっているのだ。

まわりにはビルが建ちならび、ちいさな空地はコンクリートで埋められ、樹木がはこばれて小公園にされた。渋谷川も、コンクリートでおおわれ、かぼそい水は暗渠をくぐりぬけ、その下にいま地下鉄のホームがつくられた。街は時代とともに近代化され、美観が重んじられるようになった。通行人にめざわりだからと、おカミではコンクリートベいで遮断する工事をはじめたのだが、ここの住民たちは、店を閉めて戸じまりするときに、ついでに店のまえの杭をひっこぬいて帰ったのだった。

コンクリートベいではなく、よりきれいなフェンスにする案もあったが、もし火事にな

ったときに逃げ場を失う、との反対も強く、東京のなかでも、ここだけは、三十数年前の焼跡闇市のたたずまいをそのまま保存しているのである。

さいきんになって、区は区画整理による近代化をはかっているようだが、そうなると住民のほうにもすこしずつ意見のちがいがでてくるようになった。というのも、強制収用によって追いだされるようになるまえに、自分たちの手で近代化をすすめようという意見が強くなってきたのである。

屋台時代の父や母が引退したあと、その息子や娘たちは、こんな「貧民窟」から脱却して明るい店の経営者になりたい、という事業欲をもつようになった。それに六〇をすぎたひとたちも、毎日火の気を心配して暮らすよりも、コンクリートづくりの安全なところにはいりたいと思うし、近代的なビルのなかに権利をもって人に貸したアガリで余生をおくるのも悪くはない、と思ったりする。八階建てにして、トルコやサウナをいれた大ショッピングセンターを飲食店組合の力で作くろう、という案もチラホラだされたりしている。すると、一代かぎり、たいした借金もつくらず、死ぬまでここではたらいでいたいという後家さんたちは、いきおい少数派になってしまう。いままで軒をならべて、この三〇年間火事をだすこともなく、身をよせあうようにして暮らしてきたひとびとの意識のあいだに

微妙な風がふきこむようになった。いってしまえば、近代派と保守派の対立というようなものかもしれない。

少数派のあるおかみさんはこういう。

「外部の敵の買収には勝ってきたけど、いまは内部の敵に負けそうですよ」

内部の敵とは、おのれの内部に巣喰う近代化の迷信でもある。石川淳流に言えば「おまへの敵はおまへだ」ということである。

もし、この飲食店組合の力で大ビルを建設しても、膨大な借金を償却してここにのこれる旧住民は、指折りかぞえるほどのものになろう。近代化は、おなじ住民の階層を分化させ、弱いものをはじきとばしてしまう。日本のこの三〇年の歴史とはそんなものだった。このちいさな街にも、いまそれがおしよせてきたのである。

\*

自分の内部における、近代化・合理化意識について考えるとき、わたしはいつも「都電撤去」を思い浮かべてしまう。

都電撤去は、六六年、東都政の時代に都営交通自主再建案としてうちだされ、美濃部都政にひきつがれて実行され、いまなお都営地下鉄合理化としてつづいているものである。

そのときはまず、東交労組少数派支部の運賃値上げ反対運動にたいする当局側処分、それに追いうちをかけたかたちでの組合からの権利停止処分として問題化した。

免職七人をふくむ一九人の労働者の行政処分は、「スト以外で行なわれた異例の処分で、戦後のレッドパージ事件、安保闘争いらいもっともきびしいもの」(『産経新聞』六六年一月二〇日)といわれたものだった。

組合本部側が料金値上げに賛成したのは、料金値上げによる増収で、当時二二五億円といわれた都営交通の赤字をある程度解消させ、大量首切り合理化実施をふせぐ、といった理由からであった。

東交内では、大久保、青山、三輪支部などが、料金値上げ・都電撤去反対派だったのだが、ここの支部長クラスが行政処分と組合統制処分の二重処分によって活動停止とされ、都電撤去反対闘争はとりくまれなかった。やがて革新都政の出現となり、美濃部都政を守る、とのスローガンのもとに合理化はそのまま認められることになった。これにたいする与党としての対応は、社会党が「泣いて賛成」、共産党が「笑って反対」(『前衛』六六年一〇月号)というものだった。

膨大な赤字をまえにして、都電撤去は自明の理とされていた。都電は交通渋滞のまった

だなかで、死に瀕していた。都市の近代化の波に洗われて、前世紀の遺物とみられていたのである。わたしは都電撤去には反対だった。友だちに、「おまえはそういうけど、これは時代の趨勢だよ」といわれたものである。反対派は保守派であり、なにかノスタルジアにしがみついているような趣きがあった。わたしの論拠は、合理化による強制配転反対というようなものだった。が、それは左翼的なポーズとしては成立しても、配転が革新都政によってそれなりの配慮がはらわれてしまえば、色あせたものになってしまった。都電そのものが必要なのだとする明確な主張をうちだす勇氣にかけていたのである。「都市の近代化」とはなにか、そのことをもって大胆に提起すべきだった。

そのご、新宿区柳町交差点での鉛公害の問題がクローズアップされて、クルマ社会が批判され、無公害の都電がみなおされるようになった。が、そのときはすでにルールはとりはずされ、電車は姿をけし、クルマだけがわがもの顔で横行するようになっていた。その結果が鉛中毒の発生だったのである。

都市交通がクルマ中心になる。それはモータリゼーションとよばれた。モータリゼーションが自動車資本と国策によってすすめられていたとき、モータリゼーションそのもののへの批判は形成されていなかった。自動車工場のコンベアから秒単位でクルマが街にとびだ

してくる。都電はそのクルマに包囲されて邪魔モノになる。公営交通が私的生産に駆逐される。それがモーターゼーションの本質だった。安くて、安全で、無公害だった都民の足が、危険で、排気ガスをまきちらすクルマにおいたてられて道をゆずる。いまにして思えば、こっちのほうこそが、時代に逆行するものだったのだ。

近代化、合理化、公共性、便利性。そんなことばによってぬりつぶされる生活。六〇年代から「常識」とされてしまったこんな生活に、いまようやく批判がでるようになったのである。

\*

「曾ての東京の交通機関の王者も、ついに路上の邪魔物扱いされる時勢になったが、直ちに同調できぬ理由を、私は山ほど持つてゐる。『ちんちん電車』よ。まだ、まだ、君は働ける。遠慮しないで、まだ、まだ、走ってくれ」

獅子文六が都電への愛情をこめたエッセイ「ちんちん電車」を『週刊朝日』に連載したのは、六五年のことだった。そのころすでに、ひとびとは、末期症状のガン患者にむけるようなまなざしを都電におくっていた。本人は気づくこともなく、ケナゲに走っているが、もう時間の問題なのだ、といったふうに。

「ノロノロ運転」。これが都電の代名詞でもあった。図体がデカイだけのグズ。そんな存在になったとしても、その責任はべつに都電にあったわけではない。彼が走る前後を、せっかちで無遠慮なタクシーやわがもの顔のトラックがとりかこんでしまった。あとからやってきたクルマは都電を目のかたきにした。クルマは近代であり、都電は前近代である。この思想はだれかによって意識的につくりだされたものだった。

東京オリンピックを機会に都電を廃止する。当時の自民党東京都政の方針はそのようなものだった。交通法規を改正して、軌道敷地内の諸車通行を認めた。これが深謀遠慮だったのである。レールのなかにまでクルマがはいりこむ。するとことさら都電はみうごきできなくなる。そのうしろで、クルマはやけくそにクラクションを鳴らす。グズ都電めっ、くたばっちゃまえ！

六七年四月、美濃部革新都政が誕生した。都電の労働者たちは懸命の票読みをしていた。「明治百年を革新知事で」それがスローガンでもあった。革新知事は労働者の味方だ。都電も簡単になくしはしまい。そう期待するのもし人情というものである。が、議会に登場した美濃部知事は、こう挨拶した。

「私はきえてゆく路面電車にたいしてご苦労さまでしたといいたいのであります。路面電



車は長いあいだにわたって都民に安心感をあたえてまいりました。路面電車の廃止にあたってもっとも重要なことはこの安心感の確保であります。すなわち代替輸送機関への移行を円滑にし、都民の足に迷惑をかけないようにすることにあります」

都電は、革新知事によって、あっさり引導をわたされたのだった。この年の暮れ、銀座四丁目。銀座線最後の日。

「なんとなく集まった都民は四〇〇〇人ほど。知事は警視庁広報車の屋根に押しあげられ、番外のあいさつ。『みなさん、都電を廃止するのをお許しくださいあーい！』ブーツの女性が、連れの男性の肩にもたれかかり、つぶやいた。『いかすわあ、美濃部さんて』潮騒のようにわきあがった『はたるの光』の大合唱。予定されていた行事は、すべてこの波にのみ込まれ、中止になった。ともに歌う知事。そしてかよいあう青春。ただよう残映」

〔朝日新聞〕六七年二月一〇日。

銀座線最後の電車がとおりぬけると、即座に撤去工事がはじめられた。レールがはずされ、その下の敷石がほりおこされる。敷石は、茨城県の稲田御影、山梨の甲府御影、朝鮮の万成石など、各地からはこばれてきた御影石だった。それをピカピカにみがいて、こんどは銀座の舗道にしきつめる、その青写真はもうとくにできていた。